福山大学工学部紀要
第27巻 2003年12月

並列発展型民家における伝統的間取りの変化に関する研究

無漏田　芳信*

A Study on Change of Floor Plan after Reconstruction of Traditional House with Okunoma, Nakanoma and Nando

Yoshinobu MUROTA *

ABSTRACT

The traditional private house is very interesting on grasping how the floor plan changes by the reconstruction, when the regionality on floor plan of the modern housing is known. Then, I examined the floor plan before and after the rebuilding in the equal site, of traditional private house with Nakanoma, Nema and Omote in Iya Region of Tokushima Prefecture, and with Okunoma, Nakanoma or Nando in Jinseki County of Hiroshima Prefecture. As the result, I was able to collect 15 samples in Iya Region and 25 samples in Kibikogen Highlands.

In case of Iya Region, (1) In floor plan of rebuilt house, the element of entrance and corridor of the modern housing is gradually applied. (2) Omote has rebuilt arrangement and function almost. However, the case of inheriting the function of Nakanoma is observed only 20%. And, original place of Nema tends to have not been inherited. In short, it could be understood that Nakanema with three layouts changed by the reconstruction for the family life center composition from the reception center. In the order, in case of Kibikogen Highlands. (1) The widening of the depth of the site is carried out, and by widening of the first floor part and installation of the second floor, there is the increase of the floor space of the near double. (2) Okunoma, Nakanoma and Nando have fundamentally been inherited after the reconstruction. However, the layout of the living room has been changed in the southeast edge, and lavatory and bathroom change in order to establish in the back of Nakanoma. And, the tokonoma where the front side was equipped has been changed in the gable side of which the usability is good, because the Nando has been established in the back of Okunoma.

キーワード：並列発展型、民家平面、建て替え、継承性、平面構成の変化、徳島県・広島県
Keywords : developed parallel type, floor plan, reconstruction, succession of floor planning, change of floor planning, Tokushima Prefecture and Hiroshima Prefecture

1．はじめに

日本各地の伝統的な民家平面は、それぞれの気候・風土の中で培われ、文化や産業など地域社会の生活構造を反映した特有の形態を醸成してきた。その民家平面も時代とともに徐々に田の字型に移行しており、広間型や並列型・並列発展型の民家がみられる地域は少なくなってきた[文-1]。その中で、徳島県南西部の山地には、今でも並列型の発展型である中ねま三間取り民家が現存している[文-2]。また、吉備高原が広がる広島県神石郡は、中国地方において並列型や並列型のデーの背面にナンドをもつ並列発展型の民家がみられた地域の一つである[文-3]。

これらの山間地の民家は敷地の奥行きが制約される立地環境であることから、並列型、またはその発展型（以下、並列発展型と称す）という間取りになりがちであった。この並列発展型の民家が建て替えの際に、生活様式や生活構造の変化を受け、その平面構成がどのように様変わりしているのかを明らかにすることは、現代住宅の平面特性の地方性を知る上で大変に興味深いといえる。

そこで本研究は、奥行きが制約される敷地にみられる並列型や並列発展型民家における平面特性の継承性を探

* 建築学科

ることを目的とし、徳島県南西部と広島県北東部の２つの地域において同じ敷地内での建て替え事例に注目し、並列発展型の民家平面の特徴を文献や現地踏査によって理解した上で、伝統的間取りの変化について考察した。

調査対象とした並列発展型民家の間取り型は、徳島県の場合には建て替え前が中ねま三間取り、広島県の場合には同じく並列型、並列型のデーの背面にナンドをもつナンド分化型やオクナンドのある変形四間取りである。

調査地域は、徳島県の場合には文献[文-2]に中ねま三間取り民家が記載されている図１に示す６町村のうち５村を対象とし、平成13年８月～12月に、建て替え事例の採取、および部屋の呼び方や使われ方などの聞き取りを行った。採取できた19例のうち、中ねま三間取りの建て替え事例は15例にとどまった。このほか、中ねま三間取りの増改築の様子を把握するため、増改築事例も６例採取した。また、広島県の場合には、図２に示すように、神石郡（油木町、三和町、神石町、豊松村）を対象とし、平成14年８月～11月に、建て替え前の間取りが並列型または並列発展型とした。民家調査では、建て替え前の間取りと建て替え直後の間取りを把握するとともに、部屋の呼び方、使い方などに関する聞き取りを行った。その結果、建て替え前の間取りが並列型３例、同じく並列発展型19例の合計22例の民家例を収集することができた。

２．並列発展型の伝統的間取りと調査民家

２．１　徳島県における中ねま三間取り民家

中ねま三間取りとは、並列型（土間と床上の２室が桁行方向に並列する間取り）のニワ（土間）に接する室の背部を区画してネマ（寝室）を設け、ナカノマ（居間）とオモテ（座敷）の３室から構成されている間取り型をいい、並列型の発展型の一つである。中ねま三間取り民家の平面タイプを徳島県の民家調査報告[文-2]などをもとに整理すると、図３に示す６タイプに分類できる。この中には、ニワの奥にウチと呼ばれる部屋をもつ４室の場合や寝室が２室に区切られて５室の場合もみられるが、いずれも中ねま三間取りと呼ばれている。同図に、文献と調査民家におけるタイプ別事例数を示したが、調査ではウチと内縁をもつ③と④のタイプの事例が多かった。

この中ねま三間取りの代表例としては、写真１に示す東祖谷山村に現存する木村邸があげられる。これをみると、平面タイプは③であるが、便所はオモテに最も近い位置に設けられていることがわかる。また、オモテに続くナカノマは、普段は主に団らんの場として使われているが、来客が多い場合にオモテと続けて使える構造となっている。このように接客時の対応を主とした平面構成という中ねま三間取りの特徴をうかがうことができる。

写真２には、中ねま三間取り民家の建っている斜面の様子および敷地周りやその周辺状況を示した。このような斜面に建つ場合には、諸室配置において道路から敷地への進入路による影響が考えられ、母屋の向きや勝手位置など平坦地の場合の原則が崩れることも少なくない。そこで、中ねま三間取りの諸室配置に関する原則について質問すると、図４に示すように、オモテの位置は、接

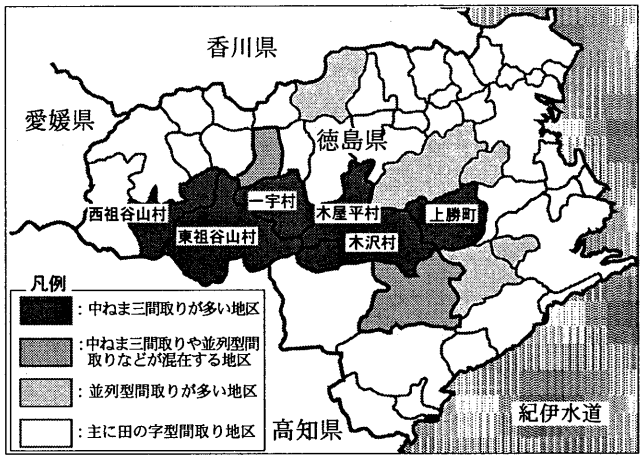


図１　徳島県における中ねま三間取り民家の現存地域[注1)]

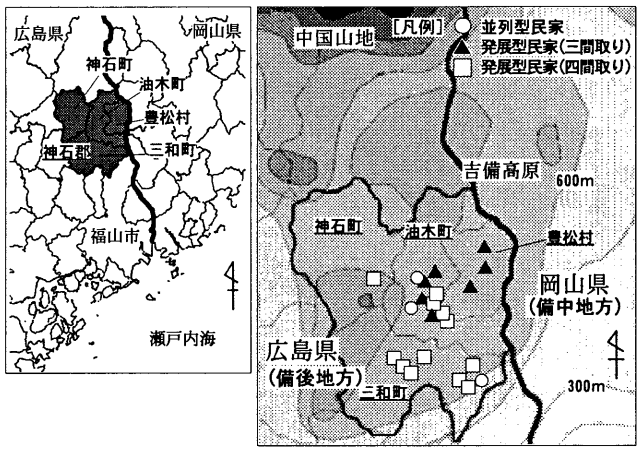
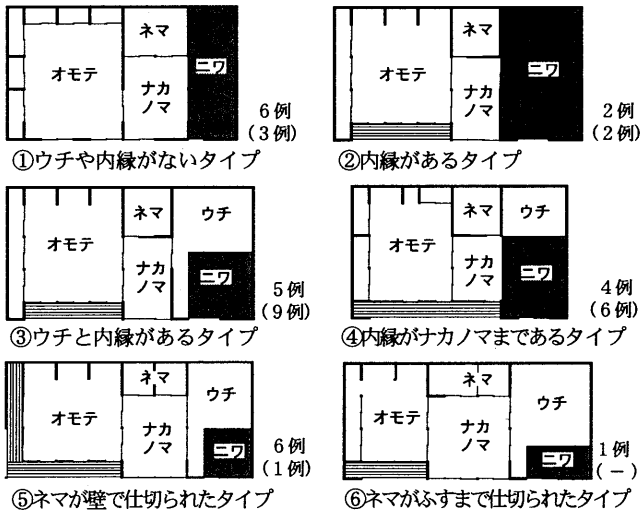
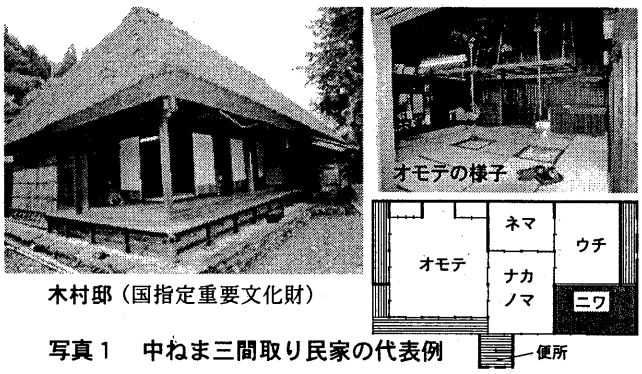


図２　広島県神石郡における調査民家の地域分布



注１)：『徳島県・香川県・愛媛県・高知県教育委員会編「日本の民家調査報告集成14　四国地方の民家」、東洋書林、1998年』などより作成
注２)：数字は、上段が文献での調査５村の事例数、下段が調査での事例数

図３　中ねま三間取り民家の平面タイプ[注1)、注2)]



木村邸（国指定重要文化財）

写真１　中ねま三間取り民家の代表例

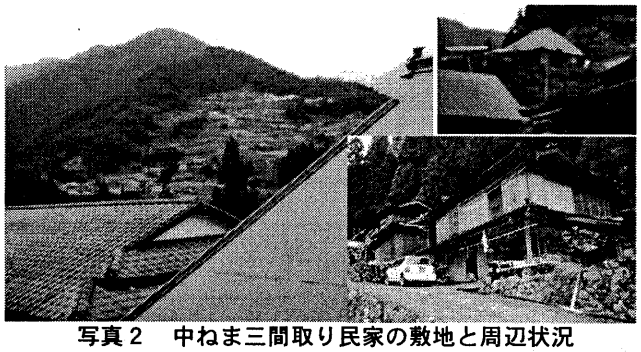
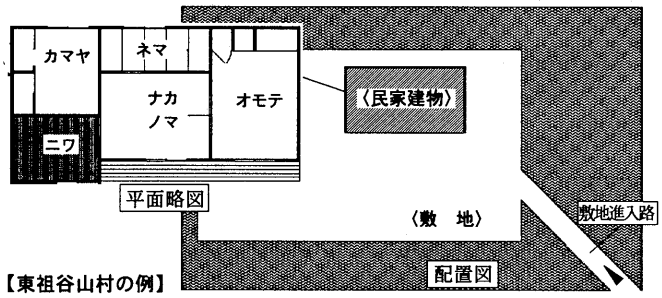


写真２　中ねま三間取り民家の敷地と周辺状況



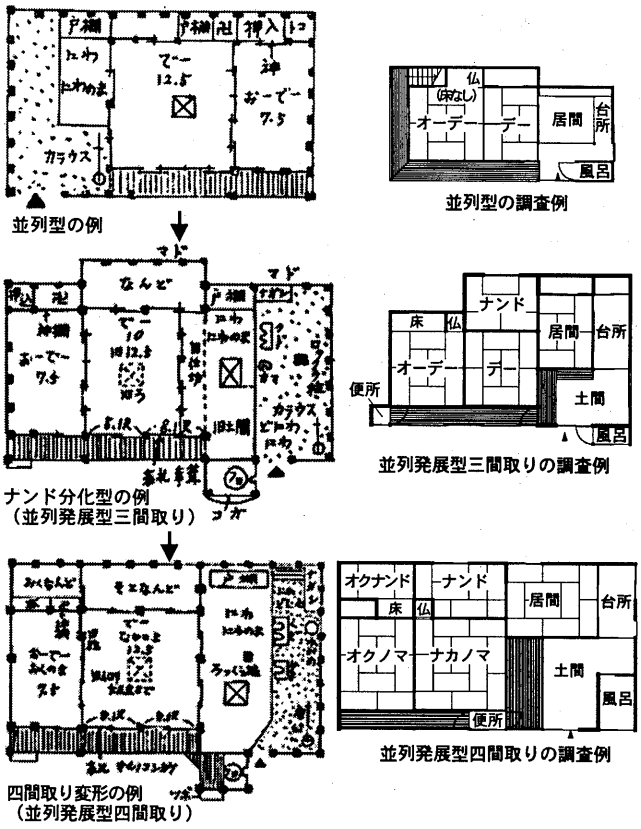
【東祖谷山村の例】

図４　中ねま三間取り民家におけるオモテの位置

道に近い場所に設けるのが昔からの慣習であるという話を聞くことができた。つまり、冠婚葬祭や接客の際に、客は内縁から直接オモテに入って来れるように、オモテを接道側に配置するようになっているという。このオモテの位置の話は、東祖谷山村では７例中７例で、西祖谷山村では５例中４例で確認できたが、木屋平村では１例にとどまり、残りの２村ではまったく聞くことができなかった。しかし、このことから中ねま三間取りは元々接客を重視した平面構成となっていることが理解できる。

２．２　並列発展型間取りと広島県神石郡の調査民家

並列型の間取りは、鶴藤鹿忠氏の「岡山県の民家研究」によると、図５に例示したように、デーの背面にナンドを設けたナンド分化型（以下、「並列発展型三間取り」と称す）に変化し、さらにオーデーの背面にもオクナンドを設けた四間取り変形（以下、「並列発展型四間取り」と称す）に発展し、ナンドやオクナンドの奥行が拡幅されて田の字型に移行したとされている。また、四間取り変形と田の字型の違いはナンドの奥行の大小によるものと理解されるが、上述の文献には「前者が１間で、後者が１間半」という記述がみられる。その一方で、ナンドの奥行が１間では寝室としては少し窮屈すぎるので１間半程度が必要というただし書きの記述もみられる。



【出典】 鶴藤鹿忠：「岡山県の民家研究」、日本文教出版、1976年

図５　並列型・並列発展型の間取りと調査例

図５の右側には、本調査で得られた代表的な並列型、並列発展型三間取り、同じく四間取りの民家平面（建て替え前のもの）を例示した。ナンドがデーの背面に設けられた並列発展型三間取りでは７例中５例は奥行１間半で、奥行１間は２例にとどまっている。さらにオクナンドをもつ並列発展型四間取りでは、ナンドの奥行１間が12例中７例と多くみられているが、奥行１間半が12例中４例と少なく、奥行２間も１例みられている。ナンドの奥行が１間では寝室として使用するには窮屈すぎることから、並列発展型三間取りにおいて、ナンドの奥行が１間半の例が多くなっているものと推察される。したがって、ここでは広島県神石郡で採取した建て替え前の間取りが並列発展型三間取りの事例、同じく四間取りの事例は、すべて並列発展型民家として取り扱うこととした。

３．中ねま三間取り民家における平面構成の変化

３．１　増改築による平面構成の変化

建て替え事例は、その建て替え時期によっては相当な増改築が行われていることが推測される。そこで、建て替え後の平面特性を考察する前に、中ねま三間取りの基本であるオモテ、ナカノマ、ネマという平面構成に対して増改築がどのような影響を及ぼしているのかを理解し

ておく必要があると考えられる。図６には、採取した中ねま三間取り民家のうち、建て替えは行われていない増改築事例の平面略図を示した。図６の上側の３例は改築のみの事例であり、下側の３例は増改築の事例である。部屋名には居住者が現在用いている呼び方を記載した。

改築のみの３例は、いずれもニワまたはウチを生活の変化に伴い台所や茶の間に変更されているが、まだオモテ、ナカノマ、ネマには手がつけられていない。一方、増改築の３例は、いずれも部屋数が少ないという理由から増築して家族の個室が確保され、かつ台所や水周りも改善されているが、オモテ、ナカノマ、ネマにはほとんど手が加えられていない。しかし、増改築後の中ねま三間取りを構成する各部屋の使われ方としては、聞き取り調査において６例ともに大きな違いはみられていない。ただし、ナカノマやネマの呼称は同じであるが、増改築事例ではオモテはすべてザシキと呼ばれるように変化している。また、ニワやウチという呼び方も消えている。

西祖谷山村の増改築事例では、便所がオモテとナカノマに近い位置に設けられているが、これは西祖谷山村や東祖谷山村では多くみられる便所の位置である。この理由を尋ねてみると、①農作物に肥料として与えるのに便利な場所であり、②火事の際に水の代わりに用いて消火するというようなことが聞かれた。なお、図６に掲げた東祖谷山村の事例は、衛生上の理由からオモテとナカノマに近い位置には便所を設けなかったという例である。

３．２　建て替えによる平面構成の変化

図７には、中ねま三間取り民家を同じ敷地に建て替えたという事例の建て替え前後の平面略図を、建て替え年順にそれぞれ対比的に掲げた。その際、建て替え後にさらに増改築が行われている場合には、その時期も併記したが、〈建て替え後〉の平面略図は建て替え直後の間取りの様子である。また、同図の部屋名は、増改築の場合と同様に居住者が実際に使用している呼び方を記した。

図７をみると、建て替えが昭和20年代の事例ではまだ廊下という概念の導入がなく、土間に入るとすぐ茶の間かナカノマとなっている。しかし、昭和30年代の事例には、廊下が設けられ、中には２階建てもみられるようになっている。これが昭和40年代の事例になると、玄関が設けられており、玄関を入ると廊下があり、直接部屋に行き来できるという現代的な間取りに近づきつつあることがわかる。このような平面構成は、昭和50年代の事例では３例中２例でみられている。昭和60年以降の建て替え事例になると、完全に廊下が各部屋へ伸びており、玄関から各部屋に直接行ける現代的な平面構成となっている。また、建て替えにより個室の確保が図られており、かつ延べ床面積も増加しているが、建て替え後もザシキ（オモテ）、ナカノマと呼ばれる部屋がみられている。

そこで、図８には、建て替え後のナカノマの使われ方

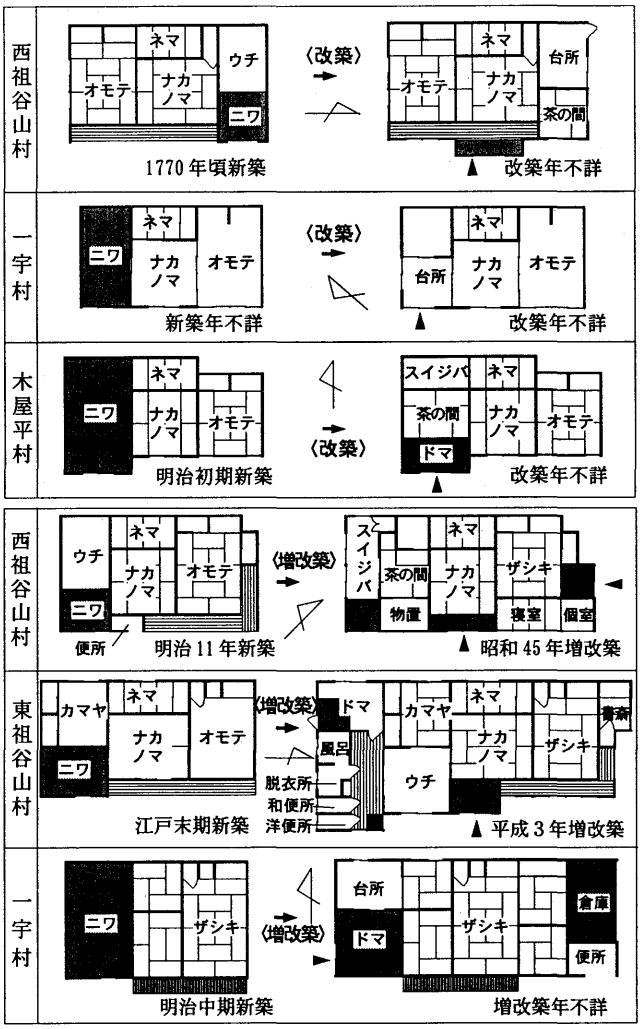


図６　増改築後の中ねま三間取り民家の平面プランの変化

や配置に着目し、その機能変化について整理した。これをみると、①ナカノマをザシキの続き間として接客にも使用できる伝統的な機能継承タイプは15例中３例にとどまり、②団らん用に別に茶の間などを設け、ナカノマは接客専用とした機能分離タイプが15例中８例と多くなっている。また、③ナカノマの配置をザシキから独立させ団らん専用とした機能変化タイプが15例中３例となっている。これらのタイプと建て替え時期との関係を図９の左図よりみると、接客から家族生活に重きを置いた平面構成に変化している場合が多いことが理解できる。この点は、寝室であるネマの場所を建て替え前と比較した図９の右図をみても、昭和40年代以降の事例において元の場所とは違う事例が珍しくないことからもうかがえる。

図10には、ザシキという呼び方に変わっている場合が多いオモテの建て替え後の変化状況について整理した。これをみると、オモテの配置や使われ方には変化がみられていないが、ふすまで２室に仕切った続き間に変化している場合が15例中７例に及んでいることがわかる。また、昔のように広い一部屋という事例も15例中５例を占めているが、残り３例は昔のものより狭くなっている。

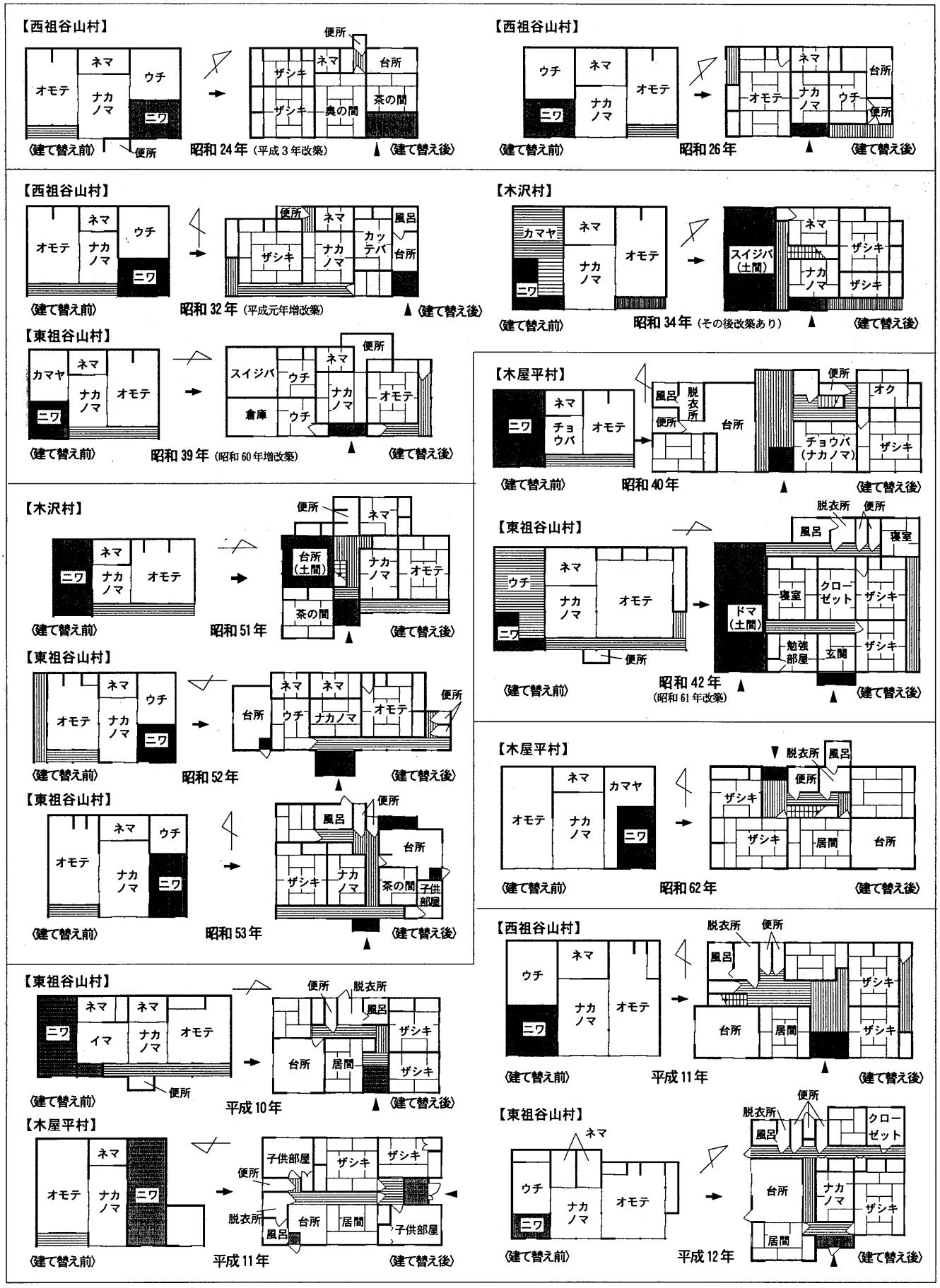


図7　中ねま三間取り民家における建て替え前後の平面略図と建て替え時期

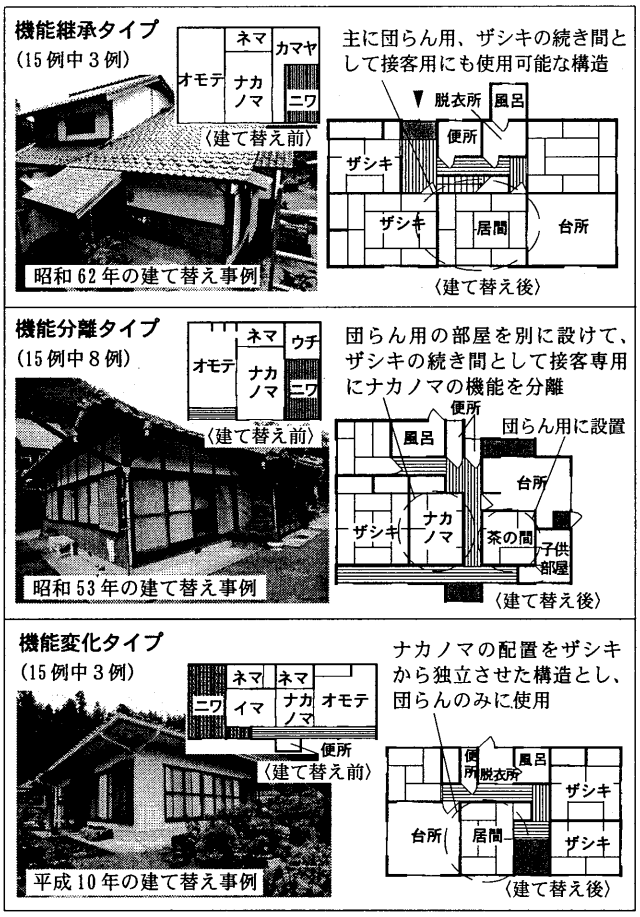


図8　建て替え後のナカノマの機能変化

4．並列・並列発展型民家における平面構成の変化

4．1　建て替えによる敷地奥行と床面積の変化

広島県神石郡の民家は、写真3に示すように、傾斜地に建っている場合が多く、母屋の裏側には斜面が迫っており、奥行が制約された敷地が多い。奥行が取れない並列型や並列発展型の間取りでは、部屋の回遊性が確保できず使い勝手が悪いことから、表1に示すように、調査民家では22例中19例において建て替えの際に敷地奥行の拡幅または敷地変更が行われている。比較的平坦地に建っている民家の場合でも同様に敷地の拡幅が行われており、前庭を広く取るなどの敷地の変化がみられている。

図11の上段には庭先の拡幅例を、下段には庭先と後背斜面の拡幅例と建て替え前後の建物の様子をそれぞれ示した。調査民家において建て替えの際に敷地の造成が行われたのは22例中15例で、その内訳は、庭先斜面を擁壁で拡幅したものが4例、庭先斜面と後背斜面を拡幅したものが6例、後背斜面のみの拡幅は5例となっている。

建て替えによる床面積の変化は、表1に示したが、家族人数が減少してから建て替えられた1例を除いてすべて2階が設けられており、3例で1階部分の床面積が微減しているものの、延べ面積はすべて増加している。調査民家22例の平均値を求めると、建て替え前は約90m²弱であったが、1階部分が約1.2倍の約110m²弱となり、延

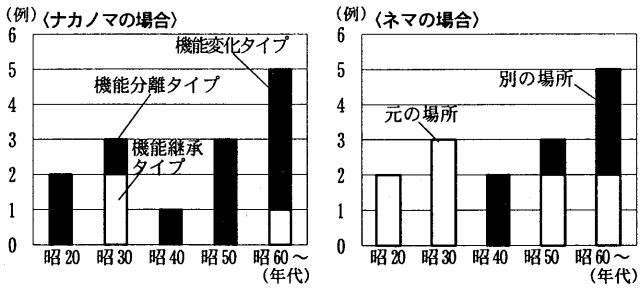


図9　建て替えによるナカノマとネマの変化

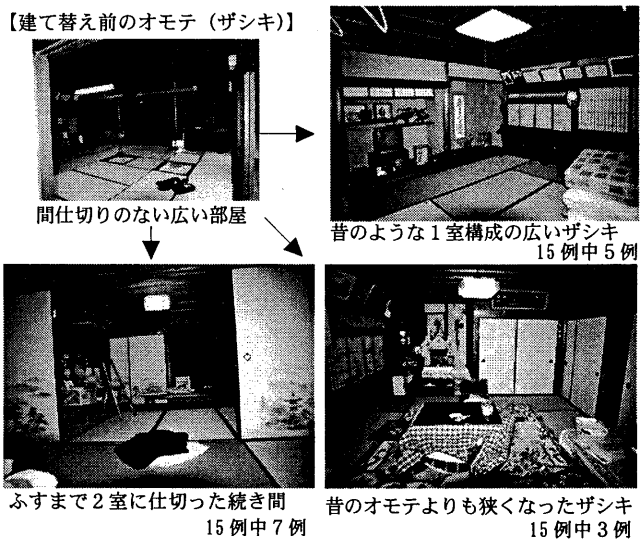


図10　オモテ(ザシキ)の室構成変化

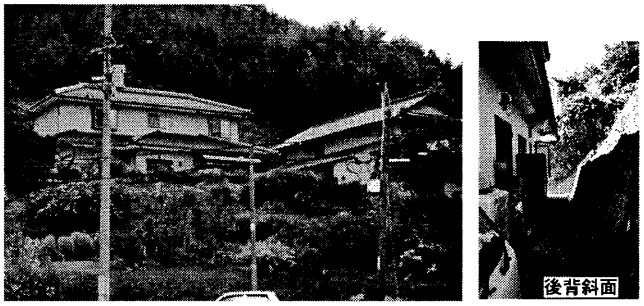


写真3　広島県神石郡における民家の立地環境例

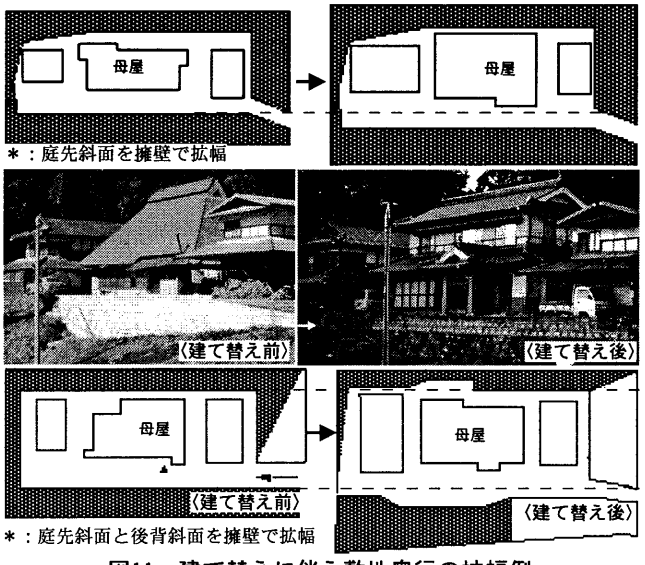


図11　建て替えに伴う敷地奥行の拡幅例

表１　調査民家の建て替えによる面積と床の間の変化

間取り型	所在地	敷地の変化(奥行拡幅)	建て替え前の床面積	建て替え後の床面積 1階	2階	合計	1階の面積増	全体の面積増	床の間 建て替え前	建て替え後
並列型	油木町	敷地変更	63	114	30	143	51	80	平床	なし
	油木町	2m拡幅	57	91	42	133	34	77	平床	妻床
	三和町	3m拡幅	57	87	47	133	30	77	なし	妻床
三間取り 並列発展型	油木町	3.5m拡幅	83	106	24	130	23	47	平床	妻床
	油木町	敷地変更	83	110	55	165	27	82	平床	妻床
	油木町	なし	128	114	51	164	−14	36	平床	妻床
	油木町	4m拡幅	83	99	51	150	16	67	平床	妻床
	豊松村	1.5m拡幅	90	105	47	151	15	61	なし	妻床
	豊松村	2.5m拡幅	99	108	52	160	10	62	平床	妻床
	豊松村	0.5m拡幅	87	101	81	182	14	95	平床	妻床
四間取り 並列発展型	三和町	5m拡幅	83	152	88	240	69	158	なし	なし
	三和町	5m拡幅	71	101	30	131	31	60	なし	妻床
	油木町	敷地変更	76	98	51	149	22	73	平床	妻床
	神石町	2m拡幅	100	112	47	159	13	59	平床	平床
	油木町	敷地変更	121	114	34	148	−6	28	なし	妻床
	三和町	なし	93	117	55	171	24	79	妻床	妻床
	三和町	3m拡幅	71	101	47	148	30	77	妻床	妻床
	油木町	なし	71	93	47	140	23	70	平床	妻床
	三和町	1m拡幅	94	127	59	186	32	92	なし	妻床
	三和町	4m拡幅	121	112	61	172	−9	52	妻床	妻床
	油木町	6.5m拡幅	121	87	−	87	−34	−34	平床	妻床
	三和町	2m拡幅	107	111	55	166	4	59	妻床	妻床

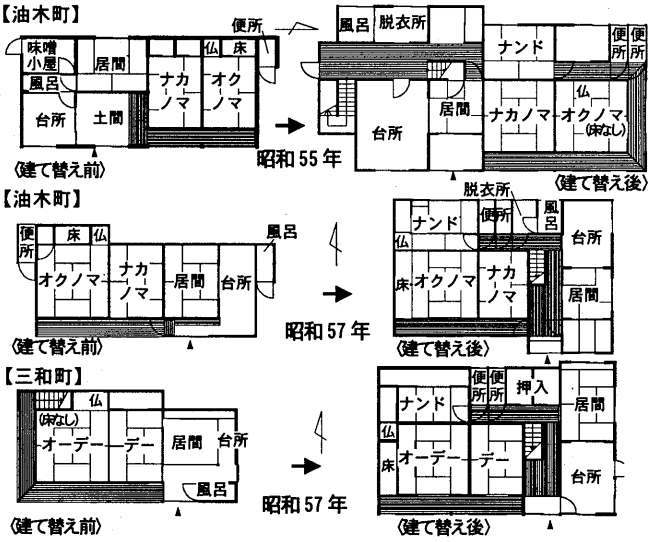


図12　並列型民家の建て替え前後の平面略図

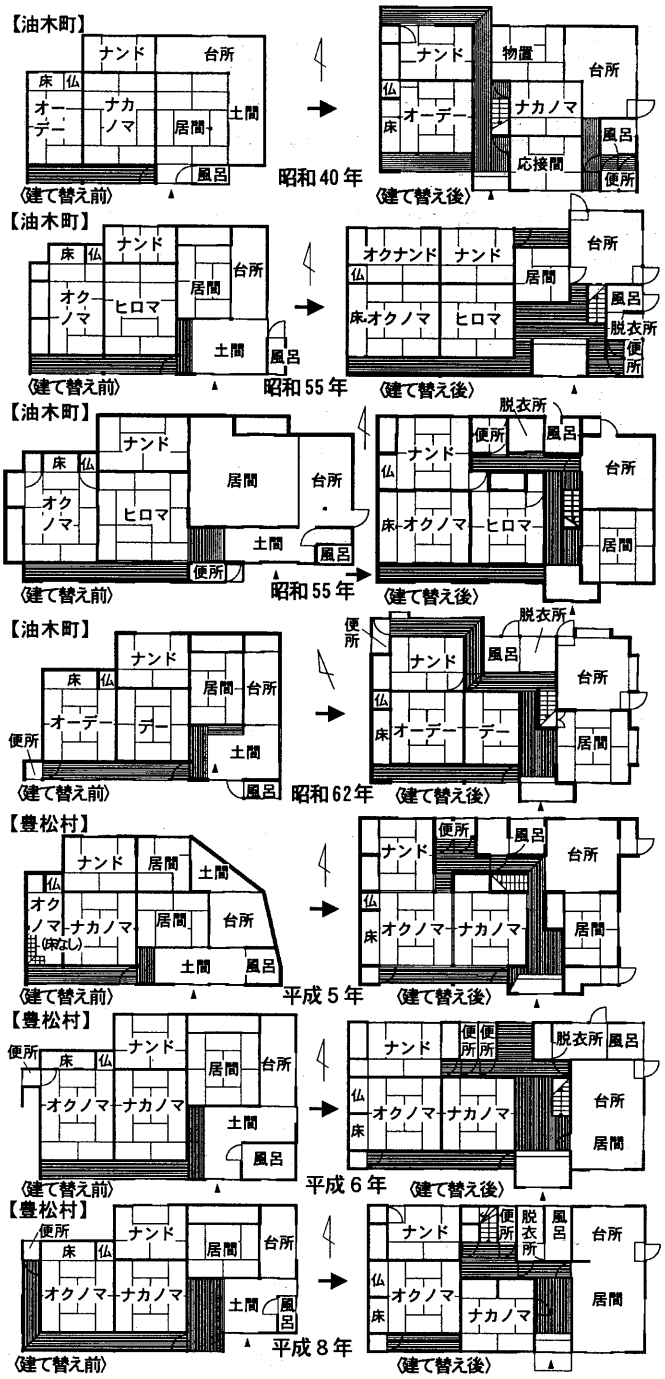


図13　並列発展型三間取り民家の建て替え前後の平面略図

べ面積が約1.7倍の約150㎡強に増加している。中でも並列型の場合には、１階部分の床面積が1.5倍～1.8倍に増えており、延べ面積では2.3倍増という値を示している。

建て替え理由としては、いずれの調査民家でも建物の老朽化、または子供部屋などの個室の確保ということしか聞かれなかった。２階部分の平面略図は紙面の関係で巻末に示したが、いずれも4.5畳～８畳の広さの部屋が設けられており、２室６例、３室11例、４室３例、６室１例となっている。その用途は寝室と子供部屋（物置）で、子供が独立した場合には客間と物置となっている。

４．２　建て替え直前の平面構成

図12～図14は、並列型、並列発展型三間取り、および並列発展型四間取りの調査民家の新旧平面略図を示したものである。この新旧平面略図は、居住者の記憶による建て替え直前の間取りと建て替え直後の間取りを示しており、室名は実際に居住者が呼んでいるものを記した。

並列型は、ニワ（土間）の隣にデー（客間、寝室）とオーデー（客間、寝室）の２室で構成されているが、並列発展型三間取りは、前述したように、デーの背面にナンド（寝室）が設けられ、四間取りはさらにオーデーの背面にオクナンド（物置）が設けられている。なお、オーデーやデーは古い呼び方で、最近ではオーデーはオクノマ、デーはナカノマやヒロマと呼ばれることが多い。

調査民家の建て替え前の間取りをみると、並列型や並列発展三間取りは、オクノマまたはオーデーには床や仏壇が設けられ、床のない２例を除くと、すべて平床となっている。並列発展型四間取りになると、12例中４例で

図14　並列発展型四間取り民家の建て替え前後の平面略図

床がなく、残りの８例は平床と妻床で折半されている。

図５の土間部分に注目してみると、並列型や並列発展型では元々土間に床を張り出した形で囲炉裏のあるニワノマが設けられていたことがわかる。このニワノマの位置は、図12～図14の建て替え直前の間取りではすべて居間となっており、また風呂は土間に取り込まれている場合がほとんどであることが読み取れる。これらは、土間部分の改造に際して行われたことがうかがえる。これに対し、便所は22例中19例が屋外から利用する構造となっており、母屋の端部などに付属されているか、または別棟か単独に設けられており、建て替え前は農作業などに重きを置いた便所配置となっていることが理解できる。

４．３　建て替えによる平面構成の変化

建て替え前後の平面略図を対比的に示した図12～図14をみると、建て替え後の最も代表的な間取りとしては、図15に例示するように、オクノマ（オーデー）、ナカノマ（ヒロマ、デー）、ナンドの３室を継承し、玄関・廊下を挟んで右手に居間と台所を、廊下突き当たりの奥に風呂・脱衣所・便所を集約させたタイプといえる。この平面タイプは、類似タイプも加えると、22例中14例にも及んでいる。また、徳島県の中ねま三間取りの場合と同様に、玄関を入ると廊下によって各部屋とつながるという平面構成の変化がみられているが、オクノマ、ナカノマ、ナンドという３室が続き間で構成されている点は異

なる。広島県神石郡では工務店に半数は居住者が事前に検討した図面を示し、半数は図面には描かないが間取りなどの要望を伝えて建て替えが行われているという。すなわち、居住者の主導によって建て替えの間取りが決められていることが強く反映されたものと考えられよう。

図15に床の間の変化を整理したが、同図右下に示すように、オクノマからナンドなどの奥の部屋への移動を容易にするため、平床が概ね妻床に変化していることがわかる。中でも、並列発展型三間取りの床の間をみると、平床６例と床なし１例の７例は、建て替え後はすべて妻床に変更されている。この傾向は、並列型の３例でも同様である。並列発展型四間取りでは、床なし４例、平床４例、妻床４例であったものが、床なし１例、平床２例に減り、残りは妻床となっている。しかも、平床の継承は１例のみで、もう１例は床なしの事例に平床が設けられたものである。このように、床の間は、建て替えによって大きく変化した平面要素であることが指摘される。

図16には、水廻り部分の建て替えによる変化について整理した。建て替え前の間取りにみられた土間部分への水廻りの集約方法に従って、風呂、さらに便所まで取り込んでいるのは３例にとどまっている。また、建て替え前の便所の配置と同じように、土間部分に風呂だけを取り込み台所・風呂と便所を分離したものが５例となっている。この８例は、居間の位置も建て替え前と同様にナンドやナカノマと台所をつなぐ位置に配置されたものがほとんどであり、基本的には建て替え前の間取りを踏襲したものと考えられる。しかし、上述した最も代表的な平面タイプを示す14例は、居間を南東端部に設けて南面させ、居間の背面に風呂・便所・台所などの水廻りを集約させている。この平面構成は、オクノマ、ナカノマ、ナンドの接客を重視した続き間を保ちつつ、現代生活に適応させた間取りへの変化がみられたものといえよう。

なお、調査での家相の話としては風呂や便所の配置に鬼門を避けることが聞かれた。建て替え後の便所・風呂の配置をみると、22例中16例では両者ともに鬼門を避けており、残り６例では便所か風呂の一方を避けている。

部屋の呼び名を図12～図14より、使われ方の変化を表２よりみると、オクノマやオーデーは建て替え後も客間として使われていることがわかる。なお、建て替え後も22例中21例が続き間を設けており、冠婚葬祭を優先した生活習慣が強く反映された間取りとなっていることがうかがえる。また、ナカノマ（ヒロマ）は建て替え前は寝室や客間に使われていたが、建て替え後は客間となっている。これらの部屋は普段はまったく使用されず、居室を２階に設けた影響と理解される。ナンドも建て替え前と使われ方は同じで、老夫婦の寝室または物置とされている。なお、表２の別棟の使われ方をみると、家族人数の変化に応じた別棟との使い分けの様子もうかがえる。

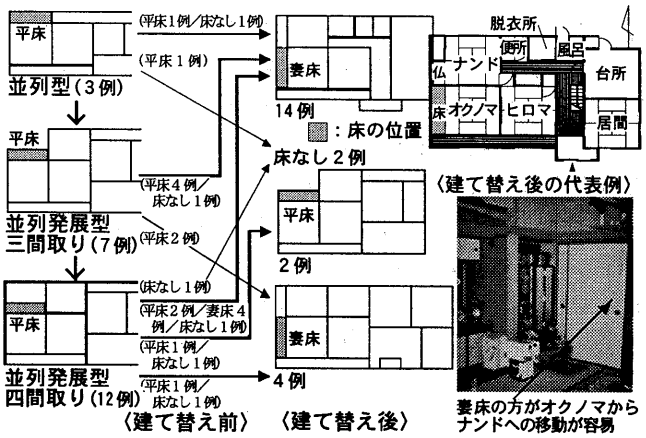


図15　建て替え前後の床の間と間取り変化

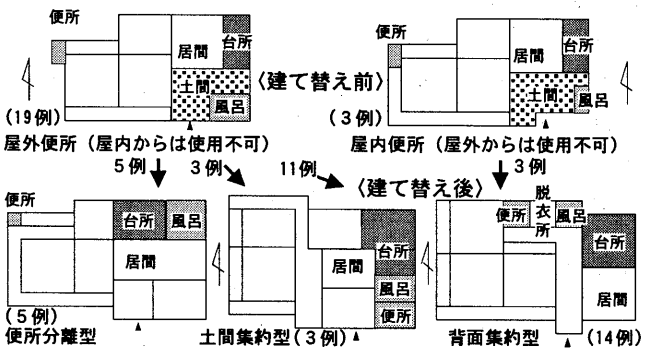


図16　建て替え前後における水廻りの配置

表２　建て替え前後の部屋の使われ方

間取り型	所在地	客間		寝室		別棟	
		建て替え前	現在	建て替え前	現在	建て替え前	現在
並列型	油木町	オクノマ	同左＋ナ	ナカノマ	ナンド＋２階	なし	子供部屋
	油木町	オクノマ	同左＋ナ	ナカノマ	ナンド	子供部屋	なし
	三和町	オクノマ	同左＋ナ	ナカノマ	同左	客間	客間
並列発展型 三間取り	油木町	オーデー	同左	ナンド＋ナ	ナンド	客間	客間
	油木町	オクノマ	同左＋ヒ＋オ	ナンド＋ヒ	ナンド＋２階	若夫婦	物置
	油木町	オクノマ	同左＋ヒ	ナンド＋ヒ	ナンド＋２階	なし	なし
	油木町	オーデー	同左＋デ	ナンド＋ナ	ナンド＋２階	若夫婦	子供部屋
	豊松村	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋デ	ナンド＋２階	なし	なし
	豊松村	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋ナ	ナンド＋２階	なし	若夫婦
	豊松村	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋ナ	ナンド＋２階	若夫婦、孫	物置
並列発展型 四間取り	三和町	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋デ	ナンド＋２階	なし	若夫婦
	三和町	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋ヒ	ナンド＋２階	若夫婦	若夫婦
	油木町	オーデー	同左＋デ	ナンド＋ナ	ナンド＋２階	物置	物置
	神石町	オクノマ	同左＋ヒ	ナンド＋デ	ナンド＋２階	物置	物置
	油木町	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋ヒ	ナンド＋２階	なし	物置
	三和町	オクノマ	同左＋ヒ	ナンド＋ヒ	ナンド＋２階	若夫婦	物置
	三和町	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋ナ	ナンド＋２階	若夫婦	物置
	油木町	オクノマ	同左＋ナ	ナンド＋ナ	オクナ＋２階	物置	若夫婦
	三和町	オクノマ、仏	同左＋ヒ	ナンド＋オ＋ヒ	ナンド＋２階	物置	若夫婦
	三和町	オーデー	同左＋デ	ナンド＋デ	ナンド＋２階	若夫婦、孫	物置
	油木町	オーデー	同左	ナンド＋ヒ	ナンド	若夫婦、孫	子供部屋
	三和町	オクノマ、仏	同左	ナンド＋オ＋ヒ	ナンド＋２階	若夫婦	物置

［凡例］ 仏：仏間　ナ：ナカノマ　ヒ：ヒロマ　デ：デー　オクナ：オクナンド

５．まとめ

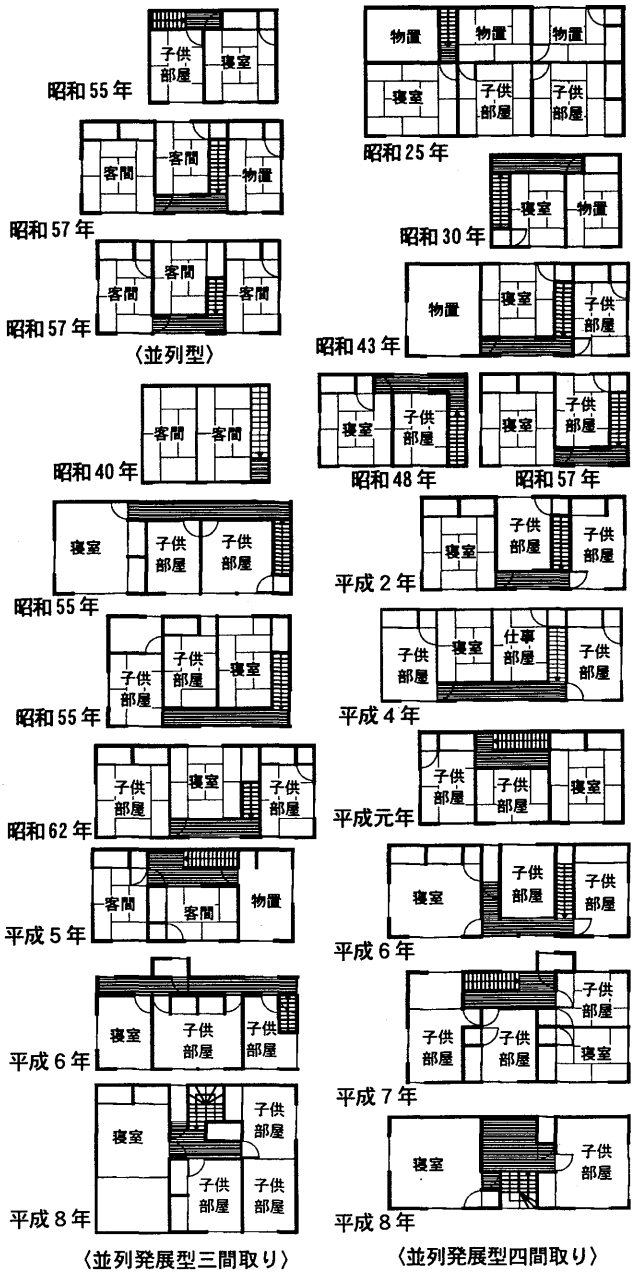
徳島県の中ねま三間取り民家の場合には、(1)増改築事例では基本的な中ねま三間取り民家の各部屋の使われ方に変化はみられていないが、(2)同じ敷地内で建て替えられた事例では、玄関、廊下という現代住宅の要素が徐々に加わり、オモテは建て替え前の配置や機能がほぼ継承されているが、ナカノマの機能を継承する事例は２割程度しかみられず、ナカノマは接客には使えない構造に変更されるか、接客専用とされており、ネマの場所も

継承されない傾向が指摘できた。つまり、中ねま三間取り民家は、建て替えによって接客中心から家族生活中心の平面構成に変化していることが理解できたといえる。

一方、広島県神石郡の吉備高原にみられる並列型および並列発展型民家の建て替えによる平面構成の変化としては、(1) 大半の建て替え事例で敷地奥行の拡幅や敷地変更が行われ、1階部分の拡幅や2階の設置によって2倍近い床面積の増加がみられていること、(2) 1階部分においてはオクノマ、ナカノマ、ナンドの3室が基本的に継承されており、中でも居間を南東端部に変更し、ナカノマの背面に便所・風呂を集約させたものが建て替え後の代表的な間取りといえること、(3) 部屋の呼び方や使い方にはほとんど変化はみられず、建て替えの際にオクノマの背面にナンドを設けているため、平床は使い勝手がよい妻床に変更されていることなどが把握できた。

以上のことから、徳島県の中ねま三間取りの建て替え事例では、建て替え時期が新しくなるに従って中ねま三間取りの特徴である接客中心の広いオモテ（ザシキ）やネマの平面構成がそのまま継承されることは少なくなっていることが読み取れるといえる。これに対し、広島県神石郡の場合には並列型の事例でも、並列発展型三間取りや四間取りの事例でも、建て替えによってオクノマ、ナカノマ、ナンドの3室をもつ間取りを基本形とした平面構成に集約されている傾向がうかがえる。ただし、居間の位置を南東端部に移動させるか、ニワノマの位置に踏襲するかにより平面構成に少し違いがみられている。

終わりに、本調査にご理解とご協力を頂いた調査民家の方々、並びに本調査研究にご協力を頂いた福山大学平成13年度学部卒業生池添真吾君および平成14年度学部卒業生本多博志君らに心から感謝申し上げる次第である。



注3)：図中の年号は建て替え時期を示し、図12～図14の事例に対応

付図1　広島県神石郡における建て替え後の2階平面略図[注3)]

参考文献

文－1：鶴藤鹿忠「中国地方の民家」、明玄書房、1966年
文－2：徳島県・香川県・愛媛県・高知県教育委員会編「日本の民家調査報告集成14四国地方の民家」、東洋書林、1998年
文－3：広島県文化財協会：「広島県民家緊急報告書」、広島県の民家、1978年
文－4：鶴藤鹿忠：「岡山県の民家研究」、日本文教出版、1976年
文－5：無漏田芳信、幸隆伸「備後地方における草葺き民家の平面特性---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その7---」日本建築学会中国支部研究報告集、第21号、520、pp.469-472 、1998年3月
文－6：無漏田芳信、幸隆伸「備後地方の草葺き民家における増改築状況---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その8---」、日本建築学会中国支部研究報告集、第21号、521、pp.473-476、1998年3月
文－7：幸隆伸、無漏田芳信「備後地方における草葺き民家平面の地域性---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その9---」、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2、5566、pp.95-96、1998年9月
文－8：無漏田芳信、幸隆伸「備後地方における草葺き民家平面の地域性に関する研究」、福山大学人間科学研究センター紀要、第13号、pp.19-30、1998年10月
文－9：無漏田芳信、池添真吾「中ねま三間取り民家の建て替え後の平面特性---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その15---」、日本建築学会中国支部研究報告集、第25号、523、pp.709-712、2002年3月
文－10：無漏田芳信「中ねま三間取り民家における平面特性の継承性---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その16---」、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2、5589、pp.145-146、2002年8月
文－11：無漏田芳信、本多博志「並列型および並列発展型民家の建て替え後の平面特性---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その17---」、日本建築学会中国支部研究報告集、第26号、529、pp.709-712、2003年3月
文－12：無漏田芳信「並列型および並列発展型民家における平面特性の継承性---現代住宅の平面プランと地方性に関する研究・その18---」、日本建築学会大会学術講演梗集、E-2、5610、pp.67-68 、2003年9月